



Title	国立工芸指導所における子ども用品研究：西川友武のデザイン思想の背景を中心に
Author(s)	神野, 由紀
Citation	デザイン理論. 2011, 57, p. 132-133
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/53351">https://doi.org/10.18910/53351</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 国立工芸指導所における子ども用品研究

—— 西川友武のデザイン思想の背景を中心に ——

神野由紀／関東学院大学

### 1. 玩具研究とモダンデザイン思想

輸出産業として発展した日本における玩具生産は、特に第一次大戦後急速に規模を拡大していくが、家内工業的な生産現場では商品改良の意識は育たず、品質の悪さなど課題が常に指摘されていた。木材工芸学会でもこうした状況を解決すべく、木檜一を中心に、木工玩具の研究開発の必要性が唱えられ、『木材工芸』でも特集が組まれた。同誌では、木檜一本人の個人的な趣味も反映され、大人の古物趣味的な郷土玩具の紹介も見られたが、玩具開発を進める上で、高島平三郎や関寛之らの児童研究における成果を積極的に採用した。子どもを年齢別、発達別、気質別に細かく区分し、それぞれの区分に相応しい用品を与えていくという合理的な手法は、既に明治末から百貨店で利用されていたが、大正末のモダンデザインを実践する人々にとって、その合理的思考は、自らのモダンデザインを広めていくための実践モデルとして積極的に採用されていった。

### 2. 国立工芸指導所における玩具研究

玩具を科学的に研究するという考えは国立工芸指導所にも受け継がれることになる。『工芸ニュース』には、玩具や子ども用家具などの記事が度々掲載されており、機能的な玩具を初めとする子ども向けの用品デザインも多く考案され、誌上で紹介されている。指導所のモダンデザイン理念から生み出された玩具も登場した。昭和18年には指導所で試作された育児玩具が複数紹介されている<sup>i</sup>。どれも木製のシンプルな玩具で、試作品につい

ての詳しい説明が掲載されている。教育的要素を付加することが、玩具の好ましい姿であるという理念に基づき、機能に即した無駄のないデザインが提案されている。教育的要素の研究が製品に上手く反映されていない現況を指摘し、試作品が考案された。

これらの玩具は、年齢別に区分され、児童の発育において明確な目的を持った機能を有していた。例えば「嵌込積木」は体の部位が発達してきた4・5・6歳用の玩具で、器用になった手先の動きをより緻密にするという目的をもった玩具である。5種類の幾何学的な型の基本ブロックを自由に組み合わせ、舟や電車などをつくるというもので、変化の多い遊びが出来ると同時に、幾何学的な要素の形態、物の量の正確な把握の仕方を子どもに学ばせることができる。基本ブロックはすべて同じ寸法を用い、その発想は今日のレゴ・ブロックなどに通じる合理的なものである。

7・8歳になると学童直前期として区分され、学童準備に相応しい、特に知的な要素が多い玩具が考案されている。その中のひとつ「機構玩具」は先の嵌込積木を高度化し対象年齢を上げたもので、土台に14ほどの細かいパーツを自由に組み合わせ、変速変形の歯車運動や円運動を直線運動への変換など、様々な動きを作り出す玩具で「組立を動かして、つぶして又拵える」という機構の世界の楽しさを体験させることが意図されている。

こうした工芸所考案の玩具類に見られる年齢区分、機能・目的の明確化は、これまでの高島・関らの児童研究の成果を集大成させたものといってよいだろう。このような玩具が

昭和17～18年という戦時色の濃い時代に開発された背景には、当時の指導所において、生産規制に連なる生産品目の厳選作業が行われていたことが重要である。不要不急品と見なされやすい玩具について、所員たちは生産禁止を回避すべく、機能を追求した、目的性の明確な玩具を開発した。戦局が厳しくなっていた昭和19年には、東京の指導所の一画に「玩具研究室」が設置され、生産禁止を危惧した農商務省担当次官や日本玩具統制協会のメンバーと、指導所員だった西川友武ら中心となり、良い玩具の設計を話し合い、玩具の保全策を講じた。「戦時中にしてはまことに和気愛あいとした雰囲気です。仕事をしていました。周り中が殺ばつな空気の中で、ここだけが何か別世界のような気持ちに感じていたのは、私だけではなかったようです。」<sup>ii</sup> とあるように、この玩具研究室には、当時の所員たちが仕事の合間に集まったという。ここには、モダンデザインの現場には異質の、大人の玩具収集趣味の眼差しを垣間見ることができる。

### 3. 西川友武と玩具デザイン

戦時下になっても、工芸指導所において積極的に玩具がつくられていたのは、当時の技師であった西川友武（1904-1974）に拠るところが大きい。多くのモダンデザインの家具や日用品を手がけた西川は、個人的に玩具に強い関心を抱き、『新しき玩具の構成』（昭和5年）、『玩具工芸』（昭和8年）など、多くの玩具製作に関する著書をのこしている。

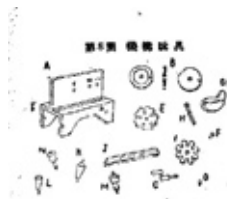
西川は、玩具を他のプロダクトと同様、工芸デザインの一分野として考え、機能を重視したデザインを目指した指導所の理念を玩具にも適用することを試みた。一方で西川は、郷土玩具の愛好家でもあり、明治期から続く江戸趣味的な玩具収集趣味の流れとも結びついていた。戦前期の日本の盛んな玩具研究の

一端には、子どもとは無関係の大人の懐古趣味の大きな勢力も存在していた。この影響は、工芸指導所と西川友武の玩具志向にも及んでいた。

このような西川の趣味としての玩具愛好は、郷土玩具から発展させた「玩具的小工芸品」を生み出した。日々の生活に疲れている大人たちに向けて、「吾々は、可愛い、黒ん坊のゐる灰皿、嬉しそうな小鳥のついたマツチ立、馬の型した煙草入れそうした玩具的小工芸品を作らう。それは安価でしかも人々の心を慰め、生活の倦退を醫やし、人生のよき伴侶となる。」<sup>iii</sup> と、商品デザインを提案している。

西川の玩具への関心が大人である彼自身の個人的な趣味であったことが、こうした大人のための玩具の商品にまでデザインを発展させたと考えられる。西川の郷土玩具に対する立ち位置は、完全にモダンデザインの論理とは言いがたいものであり、その両面性は前述の木槍恕一と重なるところが大きい。個人の趣味の結果として現れたこれらの商品群は、モダンデザインをめぐる再解釈の手がかりになるといえるだろう。

- i 「本所試作 育児玩具について」『工芸ニュース』11巻、昭和18年1月
- ii 服部茂夫「玩具研究室のことなど」『産業工芸試験所三十年史』工業技術院産業工芸指導所編、昭和35年
- iii 西川友武『新しき玩具の構成』視文堂、昭和5年



機構玩具



玩具的小工芸品（灰皿）